

生誕100周年（1912年）における ゲルツェン論争の再考

——ストルーヴェ・レーニン・トロツキー——

加藤史朗

1 はじめに インナの嘆き「誰の罪か？」

『文学新聞』第14号（2012年4月4日付）に科学アカデミー世界文学研究所のインナ・グリゴエーヴナ・プトゥーシキナのインタビュー記事が掲載されている。話題は、ゲルツェン生誕200周年についてである。以下にその概要を記す。

生誕200周年を記念する年に、ロシアではゲルツェンを扱った本が一冊も出ていない。わずかに一昨年（2010年）のイレーナ・ジェルヴァコワによる「偉人叢書」の一冊『ゲルツェン』¹⁾が目につく程度である。ゲルツェンほどの作家の生誕を祝う大きな節目の年だったら、今までなら政府が決議し、記念行事が行われた。だが、今回はそうしたこともない。ソ連時代には、ゲルツェンの著作がほとんどすべて出版され、30巻著作集の編集には私自身関わった。その他にもゲルツェンを扱った『文学遺産』が何冊か刊行され、さらには5巻の『ゲルツェンの生涯と作品に関する年譜』が編纂された。残念ながらそれらの仕事に携わった研究者のほとんどが既に世を去っている。若い世代は、ゲルツェンに対する関心を失っている。新しいことを発見するためには、実際、改めてゲルツェンを読み直し研究せねばならないのだが、そのような人がいない。

外国では、ゲルツェンに対する関心は衰えていない。彼は単に19世紀に属する人ではなく、極めて現代的な人物であると見なされ、ゲルツェンの生涯と作品に関するモノグラフも出版されている。²⁾実際、今日、ゲルツェンを紐解けば、現代世界の諸問題に対する解答を見出すことができる。

文化省は、祖国戦争200周年の記念行事の方に大わらわで、ゲルツェンのことは忘れていた。かつて彼の生誕150周年の記念集会に出たことがあるが、荘厳な式典がほかならぬポリショイ劇場で行われた。ゲルツェン

関係の本が多く出版され、記念メダルまで刻印された。200周年の式典は新装なったモスクワのゲルツェン博物館で開催され、研究者のみならず、欧米各国からゲルツェンの子孫が多数集まることになっている。

ゲルツェンに対する関心が甦るかどうか予測は出来ない。しかし、ロシア史のみならず世界史の観点から見ても偉大で真の意味で独自の人物に対する関心を喚起すべく様々な努力を行う必要がある。³⁾

このインタビュー記事では言及されていないが、ロシアにおける上述のような無関心の背後にレーニンの「ゲルツェン論」、すなわち「革命的民主主義者」と位置づけられたゲルツェン像がもたらしたイメージに対する反発あるいは嫌悪が存在していることは明らかである。ソ連時代におけるゲルツェンの偶像化が若者をゲルツェンから遠ざけたのである。レーニンの「ゲルツェン論」の決定版は、パリにおいて1912年5月8日（露暦4月25日）付の《社会民主主義者》第25号に掲載された論文「ゲルツェンの追憶」である。この論文の性格については、松原広志氏が夙に指摘されているように「生誕100周年をめぐってゲルツェン評価の動きのなかで、エスエルやカデットの主張に対抗し、彼を自らのボリシェヴィキ陣営に引き入れようとする思想闘争の産物であり、純学問的労作というよりも、対立党派との政治的争いのなかで書かれた評論といった性質のものである。」⁴⁾ レーニンの論文によってゲルツェンは、ロシア革命運動の先駆者、「歴史的偉人」としての地位を獲得した。しかしそれはとりもなおさず、ソ連崩壊後のロシアにおけるゲルツェンへの無関心の最大の原因ともなっている。レーニンの「ゲルツェン論」は、どのような時代状況と政治的背景で執筆されたのか。100年後の今日、その意義を再検討することがなければ、先のインナ・プトゥーシキナの嘆きは愚痴に終り、期待は、実を結ばないだろう。

レーニンの「ゲルツェン論」に関しては、ソ連時代に多くの研究の蓄積がある。しかし、ほとんどがあまりにも護教的であり、あらかじめ結論が見えた論文である。ここでは、それらは適宜参考にするにとどめ、レーニンのテキストを出来るだけ素直に読む。しかし、批判的となった論文は併せ読まねばならない。その最大のものが、レーニンがおそらく終生目の敵にしたピョートル・バルンガルトヴィチ・ストルーヴェ（1870-1944）の「ゲルツェン論」である。両者は、ゲルツェンの死んだ年と同じ1870年生まれであり、レーニンの処女作というべき論文『ナロードニキ主義の

経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判』（1895年）は、ストルーヴェの処女作と言うべき論文『ロシアの経済発展問題に対する批判的覚書』の批判であった。⁵⁾つまり、ストルーヴェとレーニンの関係性⁶⁾は、対照的であり、それは二人の「ゲルツェン論」にも認められる。あわせ読むことで、明らかになる点があるのではないか。

2 ピョートル・ストルーヴェの「ゲルツェン論」

①ゲルツェン会の設立（1908年）

1891～92年のロシア大飢饉の惨状を契機に高まった革命運動は、シベリア鉄道建設に象徴されるロシアの資本主義化と軌を一にしていた。また1904～05年の日露戦争が第零次世界大戦⁷⁾と言われるように、世界は、帝国主義的対立の下で「武装平和」の均衡を辛うじて保った状態にあった。ロシア国内では、1905年の革命が「10月宣言」によって終息すると、その後のストリピンの農業改革に伴い、農業の資本主義化が進み、鉱工業分野でも経済成長が著しかった。この時期、英独の建艦競争に見られるように世界的な好況の中にも「武装平和」の均衡が崩れ、世界戦争へと進む危機が見え始めていた。二度にわたるバルカン戦争が勃発する中で、革命運動はさまざまな潮流に分岐していった。

当時、革命運動の分野で時代の脚光を浴びていたのが、ロシアにおけるマルクス主義の先駆者の一人ピョートル・ストルーヴェであった。彼はミハイル・ドラゴマーノフの影響⁸⁾の下でマルクス主義を知り、ペテルブルク大学法学部に在学中の1894年にはナロードニキ主義の批判として有名になった『ロシアの経済発展問題に対する批判的覚書』を書いた。この出版は大きな反響を呼び、「合法的マルクス主義の代表的論客」⁹⁾として知られるようになった。後にストルーヴェ自身は、この書物を客観的に見た場合、内容的には「ロシア資本主義の擁護」であり、その点でヴォロンツォーフやダニエリソンなどのナロードニキ経済学者の攻撃的になったと言っている。¹⁰⁾レーニンと出会い、親交を結んだのもその年の末であった。彼とレーニンとの間には、当初から相容れない点があったと後年ストルーヴェは回想する。それは、「自由」に関する政治的、社会的な違和感のみならず、道徳的な違和感であった。¹¹⁾

彼はまた1898年にはロシア社会民主労働党の創立に際し、マニフェス

トを起草している。しかし、19世紀末にドイツで修正主義論争が起ると、徐々にマルクス主義から離れ、自由主義者としての道を進む。自由主義者であれ帝政期には国内での言論活動には制約が多かった。そこで彼は1901年にロシアを離れ、1902年からシュトゥットガルト（その後パリ）で隔週新聞《解放》の編集に携わった。根村亮氏によると、この新聞の編集活動を通してストルーヴェのゲルツェンへの共感が大きくなったという。《解放》編集部が刊行した2冊の論集のなかの第1論集の解説でストルーヴェは、「ゲルツェンが遠い未来を見据えて活動してきたことを強調し、当時の絶望的な時代状況にあっても決して破壊や不寛容を宣伝するような狂信者にならなかったと説明し、この精神を受け継ぐべきであると説いている。」¹²⁾

1905年にロシアで革命運動が高揚すると、彼は祖国に帰り、自由主義者を結集してカデット（立憲民主党）を組織した。「10月宣言」により革命の機運が退潮すると、彼はカデットの右派に属し、ポリシェヴィキとは対極に位置する思想家となった。¹³⁾

カデットは1905年～1906年にかけて文集《北極星》を刊行した。明らかに自分たちがデカブリストとゲルツェンの衣鉢を継ぐという意味の表明であった。1906年10月モスクワで行われた講演「現代ロシアの思想と政治」でストルーヴェは、カデットの綱領に言及し、「我々の左右に存在している有名な諸党派と本質的に異なる点は、……我が党が階級的ではないということである」と述べ、自分たちの党は「国民的な党である」と断言している。(強調原文)¹⁴⁾「超階級性」の他に彼がカデットの綱領的な理念として挙げているのは、「革命」ではなく、「発展」という概念である。¹⁵⁾その際、注目すべきは、こうした党是を主張するにあたり、ゲルツェンを持ちだしている点である。カデットを中心とする自由主義者たちは、二年後の1908年サンクト・ペテルブルクにおいてゲルツェン会（Кружок имени А.И.Герцена）を設立し、カデットの機関紙《言葉》（Речь）がその言論媒体となった。ストルーヴェは1908年1月9日、同会の創立集会でゲルツェンについて短い演説をおこなった。テキストは、翌日の《言葉》紙に掲載され、1905年～11年の論文を集めた論集『パトリオティカ』に収録された。この演説の中でストルーヴェはゲルツェンについて「強力で見事な個性という枠組みを持った偉大で永遠の人間の典型である。ロシア文化は、ゲルツェンよりも高い、あるいは彼と匹敵できるような存在を知らない」と述

べ、ゲルツェンをそうあらしめている一番の要素を「自由」に求めている。

「ゲルツェンは、人間の精神の永遠のスティヒーヤ（自然性）としての自由の化身であった。彼はいつも戦い、いつも疑い、いつも探求した。そして他者や自身とのこうした戦いにおいても、探求においても、彼のあらゆる情念やそれ以上の情欲にもかかわらず、常に自由であった。」¹⁶⁾

この短いゲルツェンに関する演説では、もっぱらゲルツェンの内面的な独自性が追求されている。例えばゲルツェンは、ドストエフスキーやトルストイとの比較においても、その精神において際だって自由であると言う。

「ロシア文化史において、探究者や闘士の別のタイプも存在している。ドストエフスキーは神を探求し、神と格闘した。しかし常にゲルツェンには無縁のドグマチックな情念を持っていた……。 (中略) レフ・トルストイはロシア社会の発展過程において偉大な解放者であり、人間のタイプとしては、自らの内にゲルツェンが心の内で反発していた人間精神の自然性（スティヒーヤ）を体現している。それはデスポティズムである。トルストイは自由人であり、芸術家として自由に創作した。しかし私たちの記憶に残るのは、この10年間、彼は教条主義者として芸術家を駄目にした、あるいはより適切にいうなら、駄目にし続けてきたのではなかったか？」¹⁷⁾

さらにストルーヴェは、ゲルツェンにより近い存在としてトゥルゲーネフを例に挙げ、次のように論じる。

「トゥルゲーネフは、ゲーテやプーシキンのようにゲルツェンとも同じ原理、自由の原理、世界に対する自由な姿勢という原理を体現している。だが、プーシキンやトゥルゲーネフは、《客観的》なのである。彼らは創作の場面で全てを超越している。その際、全てを創作者とは別個の人生を歩み始める作品に注ぎ込むのである。こうしたタイプの人物の場合、ゲルツェンを突き動かしているような自由の欲望は存在していない。その人物にはゲルツェンとは無縁の平静がある。そうした人びとは自由に創作したが、ゲルツェンは自由そのものであった。」(《》原文)¹⁸⁾「ゲルツェンが認識したことの多くを批判し、退けることは可能である。多くの点で彼とは違った考え方をすることも出来る。だがゲルツェンという存在が自由という聖なる炎を作り上げたことは否定できない。」¹⁹⁾

1908年の時点で、ストルーヴェが強調したのは、ゲルツェンの「自由」であった。それは、1908年という時代の雰囲気と合致していた。パイプ

スの言葉を借りれば、当時のロシアでは「革命の最後の雷鳴もおさまり、警察の容赦ない鎮圧と二年続きの豊作とが相まって農村部の治安が回復し、その一方で数年続いた不況の後、産業界の活況が雇用を促進し、一連の工場のストライキも終息にむかった。……ストルィピンが権力の絶頂に立っていた。これからのロシアにとっては安定と繁栄の歳月が長く続くかのように思われていた。」²⁰⁾

しかし、第一次世界大戦の前夜において、ストルーヴェのゲルツェン論には、「自由」の他にもう一つの要素が加わる。「国民」である。ストルーヴェの論考の中では、20世紀に入ると「ナショナリズム」や「国民精神」を考察したものが目立つ。そうした兆候は1908年の「ゲルツェン論」の末尾でも見ることが出来る。

「精神的な国民的英雄の一人であるゲルツェンは、いかなる党派にもいかなる潮流にも属していない。我々が彼の著作から読み取ることが出来るのは、用意された解決策や確認済みの処方箋ではなく、自由の精神、文化、美の輝きである。」²¹⁾(下線引用者)

ゲルツェンを「精神的な国民的英雄の一人」に数え上げることで、ストルーヴェは、カデットの政治綱領の中にゲルツェンを吸収する手筈を整えたとと言えるだろう。

②ゲルツェン生誕100周年(1912年)ーゲルツェン論の変容

ゲルツェン会の人々が中心となり、1912年のゲルツェン生誕100周年の記念祭を準備した。会は1912年3月27日にペテルブルクで100周年記念の講演会を開催し、コトリャレフスキー、ミリュコフ、ストルーヴェ、コルニーロフ、ロジチェフが演壇に立った。²²⁾さらに会は、100周年を記念して、ボグチャルスキー²³⁾の『アレクサンドル・イヴァノヴィチ・ゲルツェン』²⁴⁾を刊行した。同書巻末の言葉は、ゲルツェン会の人々の気分の最大公約数と言って良いと思われる。

「ゲルツェンの遺骸をニースからモスクワに移送するということ……。人間の個人の自由の偉大な騎士が葬られねばならないのは、自由な国民(ナロード)の大地においてのみである。しかしロシアにおいて自由な生活様式の開始の時が告げられたなら、ロシアへの精神的な回帰のみならず、ロシアの栄えある息子の遺骸の回帰は全ロシアの国民的大義(национальное дело)でなければならない。」(下線引用者)²⁵⁾

記念集会におけるストルーヴェの講演は、同年の《ロシアの思想》誌に掲載されている。冒頭で彼はゲルツェンが「自由の化身」であるという1908年の発言を繰り返した後、ゲルツェンの本質を示すものとして、彼が《鐘》紙に掲げた *Vivos voco!*（生あるものに呼びかける！）というラテン語のエピグラフを取り上げている。つまりゲルツェンは、思想とか理念を生み出したが、彼の歴史的行動として大切なのは、彼の生き生きとした自由な言葉だということである。²⁶⁾「社会主義」とは、彼にあっては、偉大な理念であるが、それは単に「社会的な」問題の解決を意味するだけではない。社会主義は社会的にも個人的にも人間の品格を高めるものである。社会主義と革命の情熱的愛好者であったゲルツェンは、それらの中に自らの貴族的な夢を持ちこんだ。しかし1848年の二月革命は、ゲルツェンに大きな打撃を与え、彼は革命に対する幻滅を味わった。²⁷⁾彼の幻滅感は、『向う岸から』において「懐疑主義」として結晶している。ストルーヴェは言う。「ゲルツェンが1848年に被った打撃は、これまでになく強く深刻なものであった。彼は単に革命に幻滅しただけではなく、人類に幻滅したのであった。」²⁸⁾そうした中で「彼を救ったのはロシアであった。」²⁹⁾ストルーヴェはここから、国民化されたゲルツェン像を提示しようとする。

「ゲルツェンを救ったのは祖国との有機的な絆であり、そしてまた自らのあらゆる懐疑主義にもかかわらず、《個人の自由》への、《人間の尊厳》への純粋に宗教的な態度を常に持っており、決してそれを失う事がなかったということであった。1855年に、彼はかつてのモスクワでよくやったように、友と一堂に会した時を夢想し、友人たちに大胆に《ルーシのために、聖なる自由のために》杯を挙げるよう呼びかけたのである。

この懐疑主義者で無神論者は情熱的に愛した。というのは彼には真に祈りの対象になった聖なるものがあったからだ。『向う岸から』の尊大な懐疑主義はロシアの僕（しもべ）の形をとるもの³⁰⁾への激しい愛情の中で燃やしつくされた。すなわちこの懐疑主義は、聖なる自由を前にその姿を消したのである。……ゲルツェンを除いて、この時代の偉人達の誰もこうした歴史的な一步を進める力はなかった。だが彼にはこれ以外にとるべき道はなかった。」（《》と強調原文、下線引用者³¹⁾

ストルーヴェは、上述の判断の根拠として『向う岸から』の中から次の箇所を引用する。「個人の自由（свобода）が最も大切なことだ。そこにおいてのみ人民（народ）の実際の自由（воля）が育つことが出来る。人間

は自分自身の中で自らの自由を尊重し、それに劣らず身近な人々の自由も、人民全体における自由も大切にしなければならない。もし諸君がこのことを確信するなら、今この地に残ることは私の権利であり、私の義務であるということに賛成してくれるだろう。それは私たちの中で一個人(личность)が行う事の出来る唯一の抗議であり、その個人はこの犠牲を人の尊厳にまで高めねばならない。」³²⁾

生きた人間としてのゲルツェンは、農奴解放をはじめとするロシアの改革に向かわざるを得なかった。しかし農奴解放と言論の自由を目指したゲルツェンの実践の背後にあったのは、ロシア人民の独自性に関する「神秘主義的ナロードニキ理論」であり、「このようなメシアニズムは、まさにゲルツェンにあっては、無力で不釣り合いなものであった。」³³⁾彼には宗教的な信仰は無縁であったからである。だとすれば、彼は「宗教なきスラヴ派」であった。³⁴⁾

ゲルツェンの「神秘主義的ナロードニキ理論」は、当時、トゥルゲーネフから厳しく批判されるが、この点については、後述する。

しかしストルーヴェにおいては、ゲルツェンの言う人民(ナロード)がいつの間にか国民(ナーツィヤ)へと意識的に読み替えられている。それは、ストルーヴェが、一種の神学的論理を用いて、聖なるものへの隷属にこそ「自由」があると考えている点に繋がっている。彼はゲルツェンを「宗教なきスラヴ派であった」とも言い、その思想を「ナロードニキ的、非宗教的メシアニズム」とも言う。³⁵⁾ストルーヴェは、「祖国への精神的回帰」によってゲルツェンが懐疑主義を乗り越えたのは最晩年の著作「年老いた友への手紙」においてであったと指摘している。³⁶⁾

ストルーヴェは1912年の「ゲルツェン論」の末尾で、西欧世界においてゲルツェンは、ドストエフスキーやトルストイほど西欧人にとって身近に感じられた存在ではなかったと言う。例えば「プーシキンは世界的には知名度が低いが、我々にとっては一流中の一流であり、彼の国民的な力強さは論をまたない存在」³⁷⁾である。ゲルツェンはそうした意味でプーシキンに近い。ストルーヴェはさらにバクーニンと比較し、ゲルツェンの方が遙かにロシア的であると指摘し、「バクーニンは実際に西欧に住み、西欧のために生きた。一方ゲルツェンは《西欧に滞在こそすれ》、常に心はロシアに住み、ロシアのために生きた」と述べる。(《》原文)³⁸⁾ここまで来れば、それはもはや思い入れの世界である。ストルーヴェの対極というべきレー

ニンはどうであったか。

3 レーニンによる「ゲルツェンの追憶」（1912年）

①執筆の契機

レーニンの「ゲルツェンの追憶」は次のような挑発的な発言で始まる。

「ゲルツェンの生誕から100年が過ぎた。ロシアの自由主義陣営は、社会主義の重要な諸問題は入念にさげ、さらには革命家ゲルツェンと自由主義者との違いを綿密に隠したままで、こぞってゲルツェンの生誕記念日を祝っている。右翼の出版物も、ゲルツェンが晩年になって革命を否定したという讒言を弄しながら³⁹⁾ゲルツェンを追憶している。一方、外国における自由主義者やナロードニキたちのゲルツェンに関する発言で目立つのは美辞麗句ばかりだ。」⁴⁰⁾

ゲルツェン生誕100周年をめぐる言論界の熱気が明らかにレーニンを苛立たせていた。しかしこの苛立ちは、久しく燻っていた彼の言論活動の火勢を回復する役割を果たした。特に、個人的にもライバル意識を抱いていたストルーヴェの発言は言うに及ばず、エスエルや右翼、海外のジャーナリズムのゲルツェン評価に闘争心を燃やすようになったのである。⁴¹⁾ただしレーニンが100周年を機にストルーヴェが『ロシアの思想』誌に掲載した「ゲルツェン論」（1912年）を読んだ可能性は少ない。ストルーヴェの「ゲルツェン論」としては、1908年のゲルツェン会の設立に伴い発表されたものに触れていたと思われる。ストルーヴェのほか、ミリュコフやコトリャレフスキーの発言にも着目したであろう。⁴²⁾

「ゲルツェンの追憶」を執筆した当時のレーニンについて、妻クルプスカヤは『レーニンの思い出』のなかでこの執筆を契機にレーニンが精神的な停滞を脱したと述べている。

「イリイチの気分を最も完全にあらわしているのは、たぶん、彼が五月のはじめに書いたゲルツェンについての論文であろう。この論文は、イリイチらしいところがまことに多く、あのように人をひきつけ、あのように人の心をつかむ、イリイチ特有の燃えるような感激にみちている。」⁴³⁾

では、レーニンはどのように1912年の言論界に打って出て、独自の「ゲルツェン論」を展開したのであろうか。根村氏は、前掲の論文の中でストルーヴェの「ゲルツェン論」と対比してレーニンの「ゲルツェン論」を以

下のように要約している。

「レーニンが、自己のゲルツェン論において、ゲルツェンの懐疑主義的傾向は否定的に扱い、自由主義者がゲルツェンの懐疑的な点に注目することをいかさまとして弾劾し、最終的には彼は社会主義に向かっていたと結論付けていることを思い起こすと、両者のゲルツェン理解の根本的相違が明確になるだろう。」(下線引用者)⁴⁴⁾

根村氏の議論は、大方の研究者の見方を代表しており、レーニンの以下の発言を根拠としているように思われる。

「1848年以後のゲルツェンの精神的な破綻、すなわち彼の深い懐疑主義とペシミズムは社会主義に対する**ブルジョア的幻想**の破綻であった。ゲルツェンの**精神のドラマ**⁴⁵⁾は、ブルジョア民主主義の革命的な性格が既に失われ(ヨーロッパで)、一方で社会主義的なプロレタリアートの革命的性格が**まだ実を結ぶにいたって**いなかった世界全体の歴史的発展段階の所産であり、反映であった。このことを自由主義的な修辞学を武器とするロシアの騎士たちは理解しなかったし、理解出来なかったのである。彼らは今や自分たちの反革命的な性格をゲルツェンの懐疑主義に関する美辞麗句で覆い隠している。1905年のロシア革命を裏切り、**革命家の偉大な使命について考えることも忘れてしまったこれらの騎士たち**にあっては、**懐疑主義は、民主主義から自由主義への移行の形態**である。しかもその自由主義とは、1848年に労働者たちを射殺し、破壊された玉座を復活してナポレオン3世を拍手喝采で迎え、ゲルツェンがその階級的な性格を理解できないまま、**呪ったところの卑屈で下劣な、汚らわしく残忍な自由主義**なのである。

ゲルツェンにおいて、**懐疑主義は、《超階級的な》ブルジョア民主主義の幻想からプロレタリアートの厳しい不屈で不敗の階級闘争への移行の形態**であった。証拠となるのは、ゲルツェンの死の一年前の1869年に書かれたバクーニン宛てた《年老いた友への手紙》である。ゲルツェンは無政府主義者のバクーニンとの関係を絶っている。たしかにゲルツェンはこの断絶のなかに戦術における意見の不一致を見ているだけであって、自らの勝利を確信しているプロレタリア階級の世界観と自らの救済に絶望しているプチ・ブルジョアの世界観との間の深い隔たりを見ているわけではない。実際、ゲルツェンはここでもまた古いブルジョア民主主義のフレーズを繰り返している。つまり社会主義というものはあたかも「労働者とその雇い主、地主と町人の双方に等しく向けられた説得」を伴わねばならない

というものであった。しかしそれでもなお、ゲルツェンはその眼差しを自由主義ではなく、**インターナショナル**に、マルクスが指導したインターナショナルに、——プロレタリアートの《**連隊を集め**》、《**働かずに利益を享受している人々の世界を認めない**》《**労働者の世界**》の団結を進めたインターナショナルに向けたのである！」（《》、（）および強調原文、下線引用者）⁴⁶⁾

こうした文脈の中でゲルツェンの「懐疑主義」は、レーニンによって果たして否定的に扱われていると言えるだろうか。そうではなくゲルツェンの「懐疑主義」は、ここでは過渡期における誠実な思想家の真摯な姿勢としてむしろ逆説的に評価されている。レーニンはロシアの革命運動の発展段階に照らして、歴史的に「貴族で農奴主の革命家世代」の英雄としてゲルツェンを位置づける。彼は、既に「ロシアにおける過去の労働者の出版物より」（1906年）の中で「デカブリストたちがゲルツェンを目覚めさせたように、ゲルツェンとその《鐘》が雑階級人たちの覚醒を促した」と述べ、過渡期の思想家としてゲルツェンを評価する。「ゲルツェンの追憶」の中では、その点についてゲルツェン自身の言葉を引用しながらより詳しく語っている。

「ゲルツェンは、前世紀前半の貴族で農奴主の革命家世代に属していた。貴族がロシアにもたらしたのは、ピロンやアラクチャーエフのような輩、無数の《酒癖の悪い将校、暴れん坊、賭博者、縁日の伊達もの、猟犬番、喧嘩好き、管刑人、売春宿のオヤジ⁴⁷⁾》、さらには心優しいマニーロフ⁴⁸⁾と言った人々である。ゲルツェンは続けて書いている。《そして彼らの中から12月14日の人々、すなわちロムルスとレムスのように、野獣の乳で育てられた英雄たちの一団が生まれ出たのだ。……これは頭からつま先まで混じり気のない鋼鉄から鍛えられた伝説の勇士であり、若い世代を新しい生活に目覚めさせ、残忍で卑屈なこの世に生を受けた子供たちを清めるために明らかに破滅に至る道を意識的に進んで行った戦士、戦友であった。》⁴⁹⁾

そのような子供の一人がゲルツェンなのである。彼を目覚めさせ《清めた》のが、デカブリストの蜂起であった。19世紀40年代の農奴制ロシアにおいて、彼は自らを高め、同時代の最も偉大な思想家の水準に達することができた。彼はヘーゲルの弁証法を自分のものとした。それがおのずから《革命の代数学》になることが分かっていたのだ。彼はヘーゲルを超え

て先に進み、フォイエルバッハに従って唯物論に近づいた。《自然研究書簡》の第一書簡《経験論と観念論》は1844年に書かれたものだが、それが我々に示してくれるのは、今なお数知れぬ現代の経験論的科学家や今日の無数の観念論や半観念論の哲学者たちより頭ひとつ抜きん出た思想家の姿である。ゲルツェンは弁証法的唯物論の間近に近づいて、史的唯物論の一步手前で停止した。

この《停止》こそが、1848年革命敗北後、ゲルツェンに精神的な危機をもたらしたのだ。ゲルツェンはすでにロシアを離れており、この革命を直接に体験した。彼は当時、民主派の革命家であり、社会主義者であった。だが彼の《社会主義》は、六月事件によって最終的に止めを刺された1848年当時のブルジョア社会主義とプチブル社会主義の無数の形態と変種の一つであった。それは本質的に決して社会主義ではなく、センチメンタルな美辞麗句、慈善的な夢想であり、ブルジョア・デモクラシーの、同時にまたその影響力から自由になっていなかったプロレタリアートの**その時代におけるそれなりの革命性の表現**であった。」(《》および強調原文)⁵⁰⁾

②ゲルツェンの自由主義的動揺—トゥルゲーネフとの論争をめぐって

農奴解放後、ゲルツェンはチェルヌィシエフスキーなど若い世代と論争しただけではなく、トゥルゲーネフやカヴェーリンなど同世代のロシアの自由主義者との間でも論争を展開した。レーニンはこの間のゲルツェンは自由主義的動揺(либеральное колебание)の渦中にあったと見る。特にトゥルゲーネフとの論争(1862~64年)の内容は、《鐘》に掲載された書簡体論文「終りと始め」(全8書簡)や「白髪のマグダレーナ」を通じて知ることが出来る。レーニンは「ゲルツェンの追憶」の中でそれらに言及している。

「ゲルツェンは、1848年のすべての運動とマルクス以前の社会主義の全ての形態のブルジョア民主主義のあらゆる形態がもっていたブルジョア民主主義的本質を理解していなかったのも、ましてや**ロシアにおける革命**⁵¹⁾のブルジョアの本性を理解できるわけがなかった。ゲルツェンは《ロシア》社会主義、《ナロードニキ主義》の創始者である。ゲルツェンは、**土地つきの農民解放、共同体的土地所有**、さらには《土地に対する権利》という農民の考えのなかに《社会主義》を見出していた。こうしたテーマに対するご自身お得意の思想をゲルツェンは、何度となく繰り返し述べたのであ

る。

実際、ゲルツェンのこうした教説にも、今日の《社会革命党》の色あせたナロードニキ主義に至る全てのロシアのナロードニキ主義においてもそうであるように、社会主義の要素は**ひとつかけらもない**。それは西欧における《1848年の社会主義》の様々な形態もそうであるように、ロシアにおけるブルジョア的農民民主主義が**革命的である**という同類の感傷的なフレーズであり、おめでたい夢想である。……中略……

ゲルツェンは外国で自由なロシアの定期刊行物を創刊した。この点に彼の偉大な業績がある。《北極星》はデカプリストの伝統を高く掲げ、《鐘》(1857～1867年)は全力を尽くして農民の解放のために戦った。かくして奴隷の沈黙は破られた。

しかしゲルツェンは地主貴族の世界に属していた。彼は1847年にロシアを去ったので、革命的な人民を目にすることがなかったし、それを信じていくことができなかった。ここから彼の《上層の人々》に対する自由主義的な訴えがあらわれる。ここから彼の《鐘》紙上に掲載された彼の無数の甘ったるい絞首人・アレクサンドル2世に対する手紙が生じてくる。それらは今、嫌悪感なくして読むことが出来ない。チェルヌィシエフスキー、ドブロリューポフ、セルノ＝ソロヴィエヴィチなどの雑階級出身の革命家たちという若い世代を代表する人びとがゲルツェンの民主主義から自由主義への後退を非難したとき、彼らは全く正しかった。しかしながら公平に見るならば、民主主義と自由主義との間のゲルツェンの動揺にも関わらず、彼にあっては民主主義者がやはり上位を占めていたと言わねばならない。」（《》および（）原文、下線引用者）⁵²⁾

ここに見られるのは、レーニンの論法の「政治主義的手法」と言うべきものだろう。叩いて誉める、誉めて叩くというある種の弁証法的な論法と言えるかも知れない。農奴解放を目指す動きの中で、ゲルツェンと《鐘》が果たした役割は巨大なものであった。それはロシアの「社会」のコンセンサスを形成する役割を果たした。しかし、コンセンサスの中軸にあるものは、コンセンサスがいったん崩れ始めると左右の批判的になる。レーニンはそのダイナミズムをよく見極めている。上記下線部のように述べた後、レーニンはリベラルの代表者の一人カヴェーリンを論難する。

「自由主義者的下司根性の最も嫌悪すべきタイプの一人、かつてその**自由主義的**傾向のために《鐘》にすっかり夢中になったカヴェーリンが、憲

法に反対して立ち上がり、革命的扇動を攻撃し、《暴力》とその呼びかけに反対し、忍耐を説きはじめたとき、ゲルツェンはこの自由主義的な賢者と絶交した。ゲルツェンは、《自由主義的であると装っている政府を裏で指導するために》書かれた彼の《中身の無い、馬鹿げた、有害なパンフレット》を非難し、《ロシアの人民を家畜のように、一方政府を賢者のように》描き出しているカヴェーリンの《政治的感傷主義というべき金言めいた言葉》に食ってかかったのである。」(《》および強調原文)⁵³⁾

レーニンは、ゲルツェンとカヴェーリンなどのロシア自由主義者との断絶を強調する。話題となっているのは、チェルヌイシエフスキーが逮捕された時のカヴェーリンの発言であった。カヴェーリンは革命党に対して政府が自らを防衛する権利を主張したのである。これに対して、ゲルツェンはカヴェーリンのような「惨めで取るに足らない意気地なしたちは、我々を支配しているこうした掠奪者や悪党の一団に対して悪口を言っはならぬと言うのだ」と述べている。⁵⁴⁾

標的は、カヴェーリンからトゥルゲーネフに移る。自由主義者の彼がアレクサンドル2世に手紙を書き、自らの忠誠心を吐露し、ポーランド蜂起を鎮圧する際に負傷した兵士への義捐金として、金貨二枚を提供した時、ゲルツェンは《鐘》に「白髪のマグダレーナ」と題する論説を掲載し、トゥルゲーネフの取った行動を批判した。ポーランド蜂起を擁護するゲルツェンの姿勢は、ロシア国内における自由主義者の反発を呼び、《鐘》の読者数の急激な低下を招いた。しかし彼はポーランドの自由を主張し、「ロシアの民主主義の名誉を救った。」⁵⁵⁾レーニンは、ベズナの農民蜂起の指導者アントン・ペトロフが処刑された時(1861年4月12日)、《鐘》紙に掲載されたゲルツェンの文章を引き、彼がいかに「宗務院とドイツ人の皇帝によって諸君のもとに任命された司祭たち」やツァーリを信じるなど人民に訴えたかを示し、自由主義者たちが「ゲルツェンの弱い面を褒めそやし、強い面については黙殺しながら……どんなに卑劣に卑しい中傷をゲルツェンに浴びせかけているか」と述べ、次のように結論づける。

「40年代にロシアそのものの中に革命的人民を見出すことが出来なかったのは、ゲルツェンの罪ではなく、彼の不幸であった。60年代に彼がそれを見出した時、彼は恐れることなく自由主義に反対し、革命的民主主義の側に立った。彼はツァーリズムに対する人民の勝利のために戦ったのであり、地主のツァーリと自由主義的なブルジョアジーとの取引のために

戦ったのではなかった。彼は革命の旗を掲げたのである。」（強調原文）⁵⁶⁾

③「年老いた友への手紙」をめぐる—ストルーヴェとの分岐点

さて問題は、ストルーヴェもレーニンも『向う岸から』における懐疑主義が、晩年にゲルツェンがバクーニンに宛てた書簡体論文「年老いた友への手紙」において克服されたとしている点である。

まず、ストルーヴェの方から見てみよう。彼は『向う岸から』ではなく、「年老いた友への手紙」こそがゲルツェンの最高傑作だと評価した後、ゲルツェンの文章を引用しながら次のように述べる。

「社会主義にとって《もっぱら批判と暴露だけの……時代》は終わったのだ。いかなるクーデタによっても、いかなる向こう見ずな行いによっても知識や理解は得られない。《理解という歴史的な歩みが緩慢であり、不規則であることが我々をかつとさせる》としても、われわれは破壊が創造にはつながらないことを認識せねばならない。もし1848年に、《バリケードの側が勝利したとしたら》、どうなったであろうか。20年間にわたって、荒々しい闘士たちは、自分たちが確信していた全てのことを語りつくしたのだろうか。

《彼らの遺言の中には一つとして建設的で組織的な思想も存在しなかった》。だが《経済的な失敗は、政治的な失敗のように間接的ではなく、直接的でより深刻に破滅に、停滞に、飢饉の死に導くのである》。

バクーニンはマルクスとルーゲの《ドイツ・フランス年誌》にかつて《破壊への情熱は創造への情熱である》と書いたことがあった。ゲルツェンはこうした破壊への礼賛に反対したのである。」（《》原文）⁵⁷⁾

つまりストルーヴェによれば、ゲルツェンは、「年老いた友への手紙」の中で、革命を放棄し、漸進的改革の道を選んだという。

これに対し、レーニンは「年老いた友への手紙」の第二書簡でゲルツェンが「インターナショナル」に眼差しを向けていたと指摘した。レーニンは「ゲルツェンの追憶」を次のような一文で締めくくっている。

「ゲルツェンの生誕100周年を記念するにあたり、プロレタリアートは彼を実例として革命的理論の偉大な意義を学んでいる。彼らは革命への無償の献身と人民に対する革命的宣伝というものは、種蒔きと収穫の時期とが何十年と隔たつていようとも、決して無駄にはならないものだとして理解し、ロシアと世界の革命において様々な階級が果たす役割の違いを学んでい

る。これらの学習によって豊かになったプロレタリアートは、ゲルツェンが**自由なロシア語**で大衆によびかけることによって初めてそれとの偉大な闘争の旗を掲げた唾棄すべきツァーリ君主制を打倒し、万国の社会主義的労働者との自由な同盟へ向かう道を自ら切り開いていくのである。」(強調原文)⁵⁸⁾

確かにゲルツェンは、「インターナショナル」という労働者の組織を「国家の中の国家」と見なし、「国際的な労働者の会議は次々に生ずる社会問題を扱う裁判所(ассиз)になりつつある」⁵⁹⁾としてその存在感を認めている。しかし、こうした新しい力を認めつつ、その一方で「漸進主義」という言葉の重要性を語っているのである。⁶⁰⁾レーニンのゲルツェン評価はストルーヴェの場合と同じく明らかに意図的な思い入れである。

ここでとりあえずのまとめをしておくなら、ストルーヴェとレーニンは、世界史の激動に真摯に向き合い、苦悩した「ゲルツェンという大きな知性」⁶¹⁾が有する意義の大きさに気付いていた。そのために両人はゲルツェンの「動揺」を左右の端でとらえようとした。1848年の二月革命の挫折がもたらした「懐疑主義」をレーニンはプロレタリアートへの期待で乗り越えたと言い、ストルーヴェはそれを「祖国への精神的回帰」⁶²⁾で乗り越えたと言っている。言い換えるとレーニンはゲルツェンをインターナショナルな観点からとらえたのに対して、ストルーヴェは、ナショナルな観点を強調した。両者がその根拠として持ち出しているのが最晩年の著作「年老いた友への手紙」であることも興味深い。さらに言うなら、レーニンの指導によって達成されたロシア革命が内戦期を経て、ナショナルな様相を帯び始めると、「偉大なロシア」を唱えるストルーヴェの見解との境界線が揺らぐことになる。それはとりもなおさず、「道標転換派」の思想⁶³⁾へと繋がって行く道筋であった。インターナショナリズムとナショナリズムは同じ銅貨の裏表に過ぎなかった。

ゲルツェンにおいては、「懐疑主義」と「自由主義的動揺」こそが、その思想の本質をなすものであった。ストルーヴェがゲルツェン会の創設に臨んで表明した「ゲルツェンは、人間の精神の永遠のスティヒーヤ(自然性)としての自由の化身であった」⁶⁴⁾という見解は、ゲルツェンの思想の本質を言い当てていた。だが、ストルーヴェの政治的立場がゲルツェンの思想を歪曲したのである。

4 トロツキーの「ゲルツェン論」（1912年）

これまで、レーニンとストルーヴェの「ゲルツェン論」を比較検討し、両者が左右の両極からゲルツェンの思想的遺産を引き裂いたという結論を得た。ここで今まであまり着目されてこなかったトロツキーの論文「ゲルツェンと西欧」を取り上げる。オーストリアに亡命中のトロツキーがゲルツェン生誕100周年によせて、キーエフで刊行されていた自由主義的な新聞《キーエフの思想》に寄稿したものである。この論文は、完全な失脚直前の1926年に刊行された『トロツキー著作集』第8巻（政治的シルエット）に再録されたが、トロツキーがソ連で抹殺されて以来、日の目を見ることはなかった。1960年にヴォロージンが編んだ「ゲルツェン生誕100周年に公刊されたゲルツェンに関する論文目録」でも、右翼や保守派の論稿でさえ丹念に拾われているが、トロツキーの論文は黙殺されている。⁶⁵⁾トロツキーの論文の内容が問題にされているのではない。トロツキーそのものが、革命の記憶の中から消し去られたからである。西欧でもこの論文は半ば忘れ去られていたが、1990年のトロツキー没後50周年を機に一部で注目され始めている。⁶⁶⁾

論文は『文学と革命』（1924年）の著者に相応しく極めて文学的であり、ストルーヴェとレーニンの「ゲルツェン論」から見ると、ナイーヴにさえ思われる。つまり、政治的な「ゲルツェン論」とは異質のゲルツェン像を提示している。決定的な違いは、トロツキーが、ゲルツェンを称揚しようとする意図を持たなかったことにある。

トロツキーはまず二月革命の敗北は反動のせいではなく、革命内部の社会的矛盾のせいであり、「指導者たちの誤謬や愚行は、歴史が袋小路に陥ったことの反映にすぎない」⁶⁷⁾と規定し、二月革命の特徴を次のように記す。

「亡命者の規模は尋常ではなかった。国を出た人々は、民族集団や政治セクトに分かれた。1848年革命の敗北は、何よりもまず1793年のジャコバン主義的伝統の敗北であった。それ以後、革命は新しい階級に軸足を移した。しかし1848年から49年にかけての運動の指導者たちは、新しい状況のなかで戸惑い、手近な盛り上がりを待望し、すべてを《初めからやり直す》ことを期待し、相変わらずの古い言葉を繰り返している。相互に絶望的な論争をしかけることで自らの士気の落ち込みを支えている始末だ。マツィーニとルドリュ・ロランによってロンドンに設立された《ヨー

ロッパ中央委員会》は、もったいぶった声明を出し、その中で進歩と自由を神聖なる財産権と調和させ、友愛は些細なクレジットの請求に墮した。人民が基盤であると宣言されながら、ヨーロッパの民主制は、神を戴いているのである。……」(《》原文)⁶⁸⁾

トロツキーはマッツィーニによる「中央委員会」への参加要請をゲルツェンが拒否したことを、ゲルツェン自身の言葉を引きながら評価している。それは「以前からの自由主義の継続であり、新しい自由の原理ではない。エピローグであって、プロローグではない」からである。⁶⁹⁾ ゲルツェンがマッツィーニやルドリュ・ロランなどに敬意を表しながら、「ヨーロッパ中央委員会」に抛る人々よりも、自分の方が思想的に豊かであり、多元的であると自身で感じていたに違いない。「ゲルツェン自身の言葉を借りれば、彼らより**自由である**ということだ。」(強調原文)⁷⁰⁾しかし、なぜヨーロッパの民主主義のリーダーたちは、ゲルツェンには自明なことを理解しなかったのだろうか。「彼らは一人一人が現実には自らの国民史の一固まりを表しており、その背後にあるのは、昨日あるいは一昨日の階級、党派、組織、出来ごとなのである。」⁷¹⁾このように伝統を引きずっている彼らに対し、ゲルツェンは孤独であった。ゲルツェンの背後にはサント・ペテルブルクやモスクワにいる幾人かの思想上の友人を除けば、その才能、洞察力、知力の柔軟さや語学力などの他に何もないのである。彼は何ものとも結びついていない。彼は「文明世界の市民 *citoyen du monde civilisé*」⁷²⁾、言い換えればコスモポリタンなのである。

トロツキーは、ゲルツェンがジェームス・ファジーやマッツィーニとあれほど議論を重ねながら、結局は虚しく、なぜ敵対するようになったかとゲルツェン自身の立場に立って問う。彼らにとって問題は、政治すなわち一時的な必要性への妥協であったとしたら、彼らはなぜあれほど興奮していたのだろうか。ゲルツェンは彼らの意識が自由主義か社会主義かあるいはその融合したものかを選択する際に、自分と同じように自由であることを望んでいた。だが彼らにとって問題は抽象的な議論ではなく、政治的な問題、すなわちどの階級を支持基盤とするかであった。だから彼らは単に議論していたのではなく、「興奮していた」のであり、生死をかけて戦ってさえたのである。

トロツキーはゲルツェンのみならず、ロシアのインテリゲンツィヤに特有の「余計者意識」を鋭く突いている。

「ゲルツェンは異なった政治的見解や偏見と戦いながら、次のような結論に達する。自分の優位は、心理上の《無垢 незосоренность》であることだ。すなわち彼がミシュレに述べたように《思索するロシア人は世界で最も自立した人間》⁷³⁾である。」(《》原文)⁷⁴⁾

次いでトロツキーは、あたかもゲルツェン自身の発言であるかのように、ドストエフスキーの『未成年』からヴェルシーロフの発言を引く。「私はフランスにおいてはフランス人、ドイツ人と一緒にいればドイツ人、古代ギリシア人となるとギリシア人である。そしてまさにそのことによって私は真のロシア人になり、もっともロシアのために尽くすのだ。……彼らは自由ではない、自由であるのは、私たちだ。当時ヨーロッパで自由であったのはロシア的憂愁を抱いた私だけであった。」⁷⁵⁾トロツキーはこの発想をゲルツェンのものと考え、ゲルツェンが1849年にロシアの友人たちに書き送った言葉を繋げる。「一握りの人々、わずかな思想、運動を止めることが不可能だということを除いて私はここでは何も信じていません。」⁷⁶⁾

しかしトロツキーは、こうしたゲルツェンの「思い」を追い詰める。「一握りの人々」というのは、ゲルツェンのように洞察力のある「傍観者」にとっては全く明らかな対立と意見の食い違いに満ちていた。一方、「運動を止めることは不可能」とは言っても、その運動が仮に空想的で直情的な人々あるいは逆に絶望的で無気力な人々の集まりに依存しているとしたら、さらにはまた既に思想の歴史によって使い古された少数者に依拠するとしたら、それは全く不分明で不確かな信念というべきである。こうした点からトロツキーは、「1848年から1849年の体験に対するゲルツェンの実際の答えは、社会的懐疑主義であった」と指摘し、「古い希望や期待あるいは信念の崩壊は、彼にとって絶望的な大衆の反逆の下で文明全体が崩壊せざるを得ないということを意味した」という結論を導き出したのであった。⁷⁷⁾彼は1848年の革命家たちには見えなかった古い綱領や党派やセクトの崩壊を的確に見抜いたが、その背後にある新しい歴史の動きを知ることはなかった。「祖国への自らの精神的回帰を遂げた」⁷⁸⁾ゲルツェンは、この崩壊の後に来るものとしてスラヴ世界に期待した。トロツキーは「ここに社会発展の科学的システムの創始者たちとゲルツェンとの間の相容れない敵意が存在しているのである」⁷⁹⁾と冷静な判断を下す。

彼は、この論文に先立つ1901年4月にゲルツェンについて論じたことがあった。同年の1月にサンクト・ペテルブルクで刊行された月刊の《世

界史通信》(Вестник Всемирной Истории) 誌第2号に掲載されたペロゼルスキー⁸⁰⁾の論文「ゲルツェンと“若い世代”」⁸¹⁾について、当時シベリア流刑中のトロツキーはその批評論文を《東方評論》(Восточное Обозрение) 紙⁸²⁾の第88号(1901年4月22日付)と第91号(4月26日付)に寄稿した。このなかでトロツキーは、ペロゼルスキーがゲルツェンを支持してピーサレフなど「若い世代」を批判している点を取り上げ、それを「穏健であることへの熱中 азарт умеренности」⁸³⁾にほかならぬとして非難している。トロツキーに言わせると、彼はあまりにも40年代人と60年代人を図式的に描き、前者の柔軟性と後者の硬直性を対比させ過ぎている。⁸⁴⁾1901年の時点でトロツキーがその論を締めくくるにあたって述べた皮肉は、ストルーヴェやレーニンの「ゲルツェン論」と重ね合わせて考えてみると、示唆的である。

「我々はおそらくゲルツェンが復活あるいは正当化される《時代》を迎えるだろう。それは当然ある種のゲルツェンの個人崇拜を生み出すか再生するであろう。ゲルツェンという人物があまりにも偉大な存在であり、ロシアの社会的な自己意識の発展史において彼の功績が極めて顕著であるので、どのようなことであれ、特にゲルツェンに代わって登場した世代、ロシア社会の先進的な人々を追憶する際に独自で、決して人後に落ちない世代を貶めるという犠牲を払ってまで我々はゲルツェンを過大に評価したり、過剰に称賛したりする必要はないし、そうすることは出来ないし心底から確信している。」⁸⁵⁾

こうしたゲルツェンとの距離の取り方は、1912年の論文の結びにも表れている。トロツキーは、ゲルツェンをあくまで西欧派と考えている。ゲルツェンに始まるナロードニキ主義は、決して西欧の排斥ではなく、むしろ逆に「せっかちな西欧主義」であるとして、次のように述べている。

「ゲルツェンは《科学》を認めるだけでは不十分だ、自らを《科学に向けて》教育しなければならないと言っている。ゲルツェン自身が《ヨーロッパ》に向けて我々を教育した最も熱心な教師の一人であった。彼のヨーロッパとの衝突やヨーロッパに対する彼の呪いは、ヨーロッパに対する彼の崇高な、だが性急な羨望が生み出したものにほかならない。ある熱心家たちは乱暴に、《ゲルツェンに帰れ!》と言っている。我々はそうした人々に従いはしない。ゲルツェンの先へ!と言う。だがこれが意味するのは、人民を《ヨーロッパに向けて》教育することなのだ。」(《》原文)⁸⁶⁾

この結びの言葉は初期の論文「科学におけるディレクティズム」（1842年）から最晩年の著述「年老いた友への手紙」（1869年）に至るまで、ゲルツェンには、一貫して「科学」と「教育」への信頼があったことを言い当てている。

5 むすびとして Who is to blame?

2012年4月6日金曜日の夕方、モスクワのゲルツェン博物館で、ゲルツェン生誕200周年の記念行事が行われた。世界各地からゲストが参集し、200人規模の華やかな祝典となった。しかし、その内の約50人はゲルツェンの一族であった。中心となっていたのが、ゲルツェンの玄孫マイケル・コンスタンチノヴィチ・ヘルツェン（1939年生まれ、ロサンジェルス在住）である。彼は4月6日、記念式典に先立ってRTテレビの英語によるインタヴュー番組「スポットライト」に出演し、翌日それが放映された。その中で記憶にのこったのは、次のような発言である。

「欧米においては、アイザイア・バーリンの著作のお陰で、ゲルツェンへの知的関心が持続されている。最近では、トム・ストッパードの演劇「コースト・オブ・ユートピア」⁸⁷⁾の上演が大きな反響を呼び、若い人々もゲルツェンに注目している。しかし、ロシア国内では彼への関心は高いとは言えない。様々な要因があるだろうが、彼が外国で死に、ソルジェニーツィンのように帰国しなかったこともあるだろう。またゲルツェンは様々な政治的な理念を定式化したが、そのボタンを押す人ではなかった。例えばアレクサンドル2世の農奴解放令などの諸改革はゲルツェンのアイデアであった。ゲルツェンが生涯にわたって追求したのは、自由であった。近年はアメリカでも基本的な自由が失われつつある。そうした中でゲルツェンの遺産は意義深い。」⁸⁸⁾注目したいのは、そのインタヴューの見出しが、Who is to blame? : 200 years after（誰の罪か? : 200年を経て）となっている点である。

当日の会場ではゲルツェン家の人々の多彩さに比べると、研究者の姿は目立たなかった。⁸⁹⁾そうした中で長縄光男（横浜国立大学名誉教授）、松原広志（龍谷大学名誉教授）それに私の三人が日本から出席したことには少なからぬ意味があると思う。特に長縄氏が『過去と思索』の完訳に続き、生誕200周年の年に『評伝ゲルツェン』を刊行したことは、特筆すべきで

あり、館長のジェルヴァコーワは、長縄氏が贈呈した著書を会衆に紹介し、スピーチを求めた。長縄氏は、ゲルツェンの思想の後継者を志し、ポリシェヴィキとの妥協を拒否して亡命生活を送ったフョードル・ロジチェフ(1854-1933)を例に挙げ、「人間の自由と尊厳」に対して思想的な情熱を持ち続けることの悲劇性とその意味を説いた。スピーチを氏は次のような言葉で結び、満場の拍手を浴びた。「理想なくして人は真に良き人生を歩むことはできない。だが理想を掲げて生きることには困難が伴う。私は、現代世界においてゲルツェンの生涯が示す意味をより深く考えてみる必要があると思っている。」⁹⁰⁾

グローバリゼーションが容赦なく進行する中で、ゲルツェンの「誰の罪か？」という問い掛けはますます重く深い意味を帯びてくるに違いない。



マイケル・ヘルツェン氏と筆者



長縄光男氏とジェルヴァコーワ館長

注

- 1) Ирина Желвакова, Герцен, М., 2010. 2011年にタンボフでエフテエヴァ(Евгеева, Татьяна Владимировна)が哲学博士候補論文《“Россия” и “Запад” в цивилизационной концепции А.И. Герцена》を刊行しているがウェブ上でレジユメを見たのみで本文は未見。<http://www.dissercat.com/content/rossiya-i-zapad-v-tsivilizatsionnoi-kontseptsii-ai-gertsena#ixzz29UPT9uUk> (2012年10月17日アクセス)
- 2) 長縄光男『評伝ゲルツェン』、成文社、2012年が意識されている。
- 3) Птушкина, И.Г., «Читать его нужно!» в 14 номере “Литературной газеты” от 4 апреля 2012 года.

- 4) 松原広志『ロシア・インテリゲンツィヤ史』、ミネルヴァ書房、1989年、209頁。
- 5) Струве, П., Мои встречи и столкновения с Лениным, «Русская идея» т.1, М.,1994, стр. 388.
- 6) 二人の関係を詳しく描写している研究としてアメリカとロシアで刊行された二著を挙げる事が出来る。
Pipes, R., Struve, Liberal on the Right 1870–1905, Cambridge, Mass.,1970.
Белов, С. В., История одной «дружбы» (В. И. Ленин и П. Б. Струве), СПб., 2005.
- 7) The Russo-Japanese War in Global Perspective: World War Zero, Volumes I and II (Brill Academic Publishing: Leiden, The Netherlands, 2005; 2007).
- 8) Struve, P., My Contacts and Conflicts with Lenin: I , The Slavonic and East European Review. Vol. 12, No.36, Apr., 1934, p. 580参照。
- 9) ストルーヴェはこれをレーニンの表現だとしている。レーニンはストルーヴェ主義という言葉を「合法マルクス主義」の同義語としても使っている。
ibid., p. 581.
- 10) ibid.
- 11) ibid., pp. 583–584.
- 12) 根村亮「ピョートル・ストルーヴェのゲルツェン論をめぐって」、一橋大学社会科学古典資料センター年報13、1993年、21頁。
- 13) ロシア・インテリゲンツィヤを批判した論集『道標』（1909年）の編集でも彼が中心的役割を果たした。
- 14) Струве, П., Идеи и политика в современной России, Избранные Сочинения, стр. 46.
- 15) Там же.
- 16) Струве, П., Герцен, «Patriotica», СПб, 1911, стр. 526–527.
- 17) «Patriotica», стр. 527–528.
- 18) Там же, стр. 528.
- 19) Там же, стр. 529.
- 20) Pipes, op.cit., p. 176.
- 21) Струве, Указ соч., стр. 530.
- 22) Володин, А. И., Юбилей Герцена 1912 г. и статья В. И. Ленина «Памяти Герцена», «Историческии Записки», 1960, т. 67, стр 79–80. ロジチェフについては、長縄光男「ゲルツェンとロジチェフ」、横浜国立大学教育人間科学部紀要、Ⅲ、社会科学5、2003年を参照。
- 23) 本名は В. Я. Яковлев (1860–1915)、「人民の意志」派のメンバーとして活躍。ペテルブルクにおけるカザーク軍の総司令部に勤務するが、1884年に「人

- 民の意志」派との関係により逮捕され、ペトロ・パヴロフスク要塞に拘禁の後、シベリア流刑。その際、ジョージ・ケナンと知りあう。
- 24) В. Я. Богучарский, Александр Иванович Герцен, издание кружка имени Александра Ивановича Герцена, СПб, 1912.
 - 25) Там же, стр. 178.
 - 26) «Русская мысль», 1912, кн.4, стр. 131.
 - 27) Там же, стр. 132.
 - 28) Там же.
 - 29) Там же, стр. 133.
 - 30) 新約聖書「ピリピ人への手紙」第2章第7節における表現「奴隷の姿をとられて」を念頭においている。
 - 31) Там же, стр. 134.
 - 32) Там же. ゲルツェンの引用については、以下を参照。Герцен, Собрание сочинения в тридцати томах, т. VI, М., 1955, стр. 14.
 - 33) Там же.
 - 34) Там же, стр. 135.
 - 35) Там же, стр. 135-136.
 - 36) Там же, стр. 136. ストルーヴェが引用したのは、1959年1月1日付の《鐘》32・33合冊号に掲載された書簡体論説「ロシアとポーランド」(第一書簡)からの一節である。
 - 37) Там же, стр. 139.
 - 38) Там же.
 - 39) 邦訳の『レーニン全集』第18巻(大月版、1956年)12頁では「革命を断念したとそしりながら」となっていて、意味が全く逆転している。
 - 40) Ленин, В. И., Полное собрание сочинений. 5 изд., т. 21, стр. 255.
 - 41) См. Володин, Указ. соч., стр. 81-83.
 - 42) Зельдович, М., К истории статьи В. И. Ленина «Памяти Герцена», «Вопросы Литературы», No. 3, 1957, стр. 101.
 - 43) クルプスカヤ『レーニンの思い出』、松本滋・藤川覚訳、大月書店、1970年、212頁。
 - 44) 根村、前掲書、20頁。
 - 45) 原文は、духовная драма。ブルガーコフの著作で有名になった表現は、душевная драмаである。Булгаков, С. Н., Душевная драма Герцена, Киев, 1905は初め「Вопросы Философии и Психологии», 1902, кн. 4-5に発表され、さらに文集«От марксизма к идеализму», СПб, 1903に再録された。論文の冒頭でブルガーコフはゲルツェンを「国民的英雄の一人」と述べ、ストルーヴェへの影響をうかがわせている。

- 46) 引用は「年老いた友への手紙」の第4書簡と第2書簡。
- 47) 大月版では「ハレム（後宮）の従者」とあるが、意味がよくわからない。ここでは前後の「ならず者の一覧」から考えて、「売春宿のオヤジ」と訳した。原語は *серальники*。
- 48) ゴーゴリの『死せる魂』に登場する地主。夢想的で感傷的な人物。
- 49) ゲルツェン「始めと終わり」より。Герцен, А. И., Собрание сочинения в тридцати томах, М., 1959, т.XVI, стр. 171.
- 50) Ленин, Указ. соч., стр. 255-256.
- 51) ゲルツェンが言うところの「ロシアの革命」を指している。つまり「ロシア農民社会主義革命」のこと。
- 52) Ленин, Указ. соч., стр. 258-259.
- 53) Там же, стр. 259.
- 54) Там же, стр. 259-260.
- 55) Там же, стр. 260.
- 56) Там же, стр. 260-261.
- 57) «Русская мысль», 1912, кн.4, стр. 137.
- 58) Ленин, Указ. соч., стр. 262.
- 59) Герцен, Собрание сочинения в тридцати томах, т.XX, М., 1960, стр. 581-582.
- 60) Герцен, Указ. соч., стр. 583.
- 61) 長縄光男『評伝ゲルツェン』、成文社、2012年、10頁。
- 62) Булгаков, С.Н., Душевная драма Герцена, Киев, 1905, стр. 28-43.
- 63) 中島毅「道標転換派とソヴィエト権力」、『スラヴ研究 (Slavic Studies)』41号、217-244頁、1994年を参照。
- 64) Струве, П., Герцен, «Patriotica», СПб, 1911, стр. 526-527.
- 65) Володин, А. И., Юбилей Герцена 1912 г. и статья В. И. Ленина «Памяти Герцена», «Исторические Записки», 1960, т. 67, стр. 101-102.
- 66) 最近邦訳された。森田成也・志田昇訳『ニーチェからスターリンへ — トロツキー人物論集「1900-1939」』（光文社古典新訳文庫、2010年）に「ゲルツェンと西方」と題して取められている。
- 67) Троцкий, Л., Сочинения, т. VIII Политические силуэты, М-Л, 1926, стр. 232.
- 68) Там же.
- 69) Там же.
- 70) Там же.
- 71) Там же, стр. 233.
- 72) Там же.
- 73) ゲルツェンがミシュレに宛てた書簡体論文「ロシア人民と社会主義」より。Герцен, указ. собр., т. VII, стр. 332.

- 74) Троцкий, Указ. соч., стр. 233–234.
- 75) 『未成年』第3部第7章を参照。テキストの正確な引用ではない。
- 76) 『向う岸より』の冒頭にある「さらば」と題する章より。Герцен, Указ. соч., т.VI, стр. 12–13.
- 77) Троцкий, Указ. соч., стр. 234.
- 78) Там же, 「フランス・イタリアからの手紙」(1858年)からの引用。Герцен, Указ. соч., М., 1955, т. V, стр. 10.
- 79) Троцкий, Указ. соч., стр. 236.
- 80) Белозерский, Н.А., А.И. Герцен, славянофилы и западники, СПб.,1905などで知られるゲルツェン研究者。
- 81) 清水昭雄氏による邦訳がある。『トロツキー研究』(トロツキー研究所編集・柘植書房刊)第15号、1995年。ウェブ上に訳文あり。<http://www.marxists.org/nihon/trotsky/1900/gertsen.htm> (2012年10月26日アクセス)
- 82) 1882年から1905年にかけて刊行された文学と政治問題を扱った新聞。ペテルブルクで創刊されたが、1888年以来、イルクーツクで刊行された。2012年4月に創刊130周年の記念行事が行われた。
- 83) Троцкий, Указ. соч., т. XX, стр. 21.
- 84) Там же, стр. 22–26.
- 85) Там же, стр. 27.
- 86) Троцкий, Указ. соч., т. VIII, стр.
- 87) Stoppard, Tom, *The Coast of Utopia-Voyage Shipwreck Salvage*, New York, 2002. 日本での出版は、広田敦郎訳『コースト・オブ・ユートピア ユートピアの岸へ』、ハヤカワ演劇文庫、2010年である。ロシアでの初演は、2005年である。2012年春も生誕200周年に因み国立アカデミー青年劇場で上演され、我々三人も、ゲルツェンの縁者たちとともに招待された。
- 88) このインタビューの様子は、ウェブ上で公開されている。<http://rt.com/programs/spotlight/blame-200-years-herzen/> (2012年10月21日アクセス)
- 89) 冒頭に紹介したインナ・プトゥーシキナを始め、キーロフのゲルツェン記念図書館の館長ナジェージダ・グリヤーノヴァらが参加していた。
- 90) 長縄氏が用意されたロシア語のスピーチ草稿より。なお前掲の『評伝ゲルツェン』515–525頁「エピソード」も参照。

Переоценка критики творчества и личности Герцена 1912 года, приуроченной к его 100-летнему юбилею — П. Б. Струве, В. И. Ленин, Л. Д. Троцкий —

Сиро КАГО

Празднование 200-летней годовщины со дня рождения А.И. Герцена проходило в московском доме-музее Герцена 6-го апреля 2012 . Я и двое моих коллег из Японии принимали участие в этом мероприятии. И хотя в этот день вместе собрались многочисленные потомки Герцена из Европы и Америки, исследователей выдающегося публициста было на удивление мало. Один из немногих - Мицуо Наганава, опубликовавший в Японии труд «Герцен: жизнь и творчество». Японский исследователь любезно передал свою книгу в дар музею. А накануне годовщины в 14 номере «Литературной газеты» (от 4 апреля 2012 года) была опубликована статья-интервью Инны Григорьевны Птушкиной (из Института мировой литературы имени Горького). В интервью Инна Григорьевна сетует на то, что в современной России Герцена совсем не читают, и, несмотря на то, что весь 2012 год посвящён памяти Герцена, в России не планируется выхода ни одной книги, посвященной его жизни. Министерство культуры тоже больше внимания уделяет празднованию 200-летия Отечественной войны (1812 года), а о Герцене совсем забыло. В 150-летнюю годовщину ситуация была совершенно иной.

Безразличие к Герцену после распада Советского Союза явилось реакцией на то, что в СССР его буквально боготворили. Орудием популяризации Герцена как великого российского революционера послужила статья Ленина «Памяти Герцена» (1912 г). Однако задумайтесь: в какую эпоху и в какой политической обстановке была написана эта статья? На сегодняшний день, 100 лет спустя, без переосмысления этой статьи и без избавления от её «проклятия» возрождение интереса к личности и работе Герцена представляется невозможным.

При изучении взглядов Ленина на личность Герцена также следует

принимать во внимание мнение о нём Петра Бернгардовича Струве, который посвятил свою работу критике Ленина. Если провести сравнительный анализ их взглядов, можно обнаружить, что Ленин рассматривает идеи Герцена с «интернациональной», а Струве - с «национальной» точки зрения. Однако это лишь две стороны одной медали, если интерпретировать идеи Герцена с позиции политики.

Здесь можно также вспомнить другую полузабытую статью. Статья Льва Троцкого «Герцен и Запад», опубликованная в газете «Киевская мысль» примерно в то же время (1912 г.) возвращает нас к истинной теории Герцена. Этот труд непосредственно рассматривает «душевную драму» Герцена, по-иному интерпретирует его идеи, и на наш взгляд автору с успехом удалось подметить особенности эволюции взглядов Герцена. Статья Троцкого в какой-то мере могла бы стать ключом к освобождению теории Герцена от «политического проклятия».